

# 大杉谷国有林からの手紙

## 28通目～29年度のシカ被害対策を振り返って(2)～

雨水となり、「土脈潤い起こる」、「霞始めてたなびく」、「草木萌え動く」と、そろそろ春に向けて動き出す準備をする時期となりました。

さて、今回の手紙では、ニホンジカの捕獲について、ご紹介します。

大杉谷国有林におけるシカ被害対策については、これまで実施してきた糞塊調査、植生衰退度調査、シカの利用可能頻度区分等の調査結果を踏まえ、安全性、緊急性、実現性、費用対効果の観点から、最優先で実行すべき地域を選定し、シカの緊急捕獲と森林植生の回復を一体的に実施しています。



捕獲開始前の捕獲従事者意見交換会

28年度からシカの捕獲を行っている「地池林道周辺地域」は、比較的緩やかな尾根地形からニホンジカの利用可能頻度が高い地域となっています。また、これまでのGPSによる行動特性調査により、夏場に大台ヶ原周辺に生息し、冬期間に紀北町海山地区など低標高地域に移動する季節個体の移動経路になっています。このため、シカの食害により森林植生が著しい被害を受けており、特に稜線部では、裸地化し、一部表土の流出が見られるようになっていています。加えて、糞塊調査によるシカの推定生息密度においても、年々生息密度が上昇するとともに、高密度に生息する地域も拡大する傾向にありました。



現地での捕獲打合せ

このため、地池林道周辺地域を早急に森林植生の回復を図る地域として位置づけ、シカの食害による森林植生の衰退を防止するため、シカの捕獲を行い、シカによる影響度を下げるとともに、植生保護柵の設置を行い、地域性苗木の植栽により植生の回復を計画的に進めています。

28年度は、9月下旬から捕獲を始めて捕獲頭数は45頭でした。今年度も、引き続き、重点捕獲区域である地池林道周辺地域において、わなによるシカの捕獲（目標50頭）を実施しました。実施に当たって

は、安全で効率的な捕獲手法を確立するため、①現地委員会の開催、②捕獲従事者との勉強会の開催、③自動撮影カメラによる誘引状況のモニタリング、④捕獲結果と捕獲効果の検証ととりまとめ、⑤今後の取組方針の検討を行いました。

28年度捕獲結果を踏まえ、捕獲区域については、周辺地域からの移動個体の侵入を考慮し、栗谷小屋までの大台林道周辺を追加しました。また、わなの設置に当たっては、事前に自動撮影カメラを設置し、データを随時整理を行うことで、希少種であるカモシカ及びクマが定期的に確認された場合は罠を稼働させないことを徹底し、錯誤捕獲を防止しました。また、クマによる捕獲個体の捕食の防止、わなの稼働時期、設置方法等の改善を図りました。



くくり罠の設置状況

捕獲時期は、定住個体群の効率的な捕獲を行うため、28年度より、開始時期を前倒しすることとし、7月中旬から開始しました。その後、シカの出没状況を見ながら、4期に分けて実施し、捕獲頭数は50頭でした。その内訳は、くくり罠で45頭（オス24頭、メス21頭）、囲い罠で5頭（オス4頭、メス1頭）となっています。昨年度より捕獲時期を早めた結果、メスの割合が増加しました。

捕獲期間中は、9月に台風16号、10月に台風21号、22号が連続してきたことから、唯一のアクセスである大台林道が不通となり、何度も捕獲が中断となりましたが、地元猟友会の紀北支部の皆さんには、「チーム大杉谷」として、頑張ってもらいました。



捕獲終了後の捕獲従事者意見交換会

2月2日の委員会において、「これまでの取組が成果を上げ始めているので、今後も、大台ヶ原地域と連携しながら計画的に取り組んでほしい」、「シカの「低密度化」が実現した後は、いまの捕獲方法では捕獲が困難となることが想定されるので、それを見越した地元の人材育成も重要である」、「季節的にシカが移動する地域では、エリアにより生息密度や行動が異なることが推測されるので、植生回復のランクも踏まえ、エリア分けを行い、それぞれのエリアで戦略を考えることが重要である。」等の意見を頂いています。

大杉谷国有林におけるシカ被害対策の最終目標は、森林植生の回復にあります。地域性苗木の植栽による森林植生の回復に向けた取組については、次回の手紙でご紹介したいと考えています。今後とも、皆様のご理解とご協力をお願いします。

**(発行:三重森林管理署 尾鷲森林事務所 地域統括森林官)**